

宇治拾遺物語

三

共八



や後拾遺物渡上末一目録
一狂人よつさて志と紀食す 一佐渡因に金子
一薬師もあ事 一妹肖鷗す
一石橋下蛇す 一東小院赤諱至事
一三川八百とんせいのす 一毛舍ぬ清冰ち家事
一業をね毛麿生す 一萬昌忠恒寺事
一坂本准院丈久佛寺地也 一
一式芥大捕多重智義西ふ神祇もあ事
一多海波下癩人ほん 一白川淀たうも連源す
一永趣僧忍更食す 一うどる実田自湖水や波又
一惠惠僧乞戒壇つまら事 一四支河原地秀事

一朴元濟理大夫也。也汝上人行而卒。

卷之三

一沙也無是事 一絕又何獨創西亦可歟是也

陪後流認仍認牙孫子

一因傳仲率

一便名暦よりうへても事

一更子根さん子ゆ

一
此空戶傳

卷之三

一束竹人入評卷中米翁

の二

一作麻雀志也。清林子
一大二象沒入小武門

よみがえり

→山模川要能比菟事 一度も寃魔王まへ名前
一をもちよ死人堀血身 一ろ三也老のじと
一けがち二千枚參毛六千枚八一觀毛化蛇

宇治拾遺の歌詠よ未

やすきとよくんせんじの兵お城とて
引ちうへくりみたきへたやうからを腰よもさ
みたきハひゆうそりあつまえうりくてそひら
色あうまをしと務志よじをもをへくこじへそ
立あうまでよ禮ゆねあくけあまくやそ
おきうまめあくよとくろなうものあくよ
う參うりくそそくれなれ

れやの國玉や鐵とりへ四ひまうねどりよ程なう
ととりて守よとくすらあふ十人そあすに実房と
りよ守乃はよくろとく取六十人の長きりけくお
カ佐渡國よとあつねの元さんうあをあくよ

うやんふいのうと守つへまくとう凡男を守
うひうてりのとう勢がとてそくじひ見
毛内やへ國玉やまこと金力ぬなり伏ーと
ろをみをきてねうなりりをせげうもきもあうりはも
とつみあうもあとつーたそじとつよふんとそ
あんこひつーと小ふーとくひゆすーと伏た
あもい伏てかううまつりこみてりやせうりてそり
きひとひつもあれうりよよまうくをしんゆそ
うちれハうれとりてそとひふをわうりよ

三一月もすまかりてうちますまつら相よこ代男
ゆくまでうそそりめがみあせざるの運ハ守ん
え世人はくもくうとうてまつわおもひぢりえ
モ神うつしよくろとくまくさいたるゆくみふ
やとくせたむりきくあこせりよひきうけて
ゆくうきへてう色玉入ふうりうれのうりう
のうきうちまの男をゆくらと色なぐうがよくよ
ほけするけもとをの方りーうとやまとす全のうまと
多ひて失なまとゆきーとちよす全のうまと
ろ浦としるやと翠と思ひうもやうこうくひも
ううれ金八千あづりうりうとあめうりほく人

うちゆくきく佑波園よき全うりうとと能登
國のものととあたりうううと
今々も薬師あれふ薬師歌とゆく人うちうとあ萬
やーをまこえととすてうのぬもくつもと極樂
よ生まんととせんねしひう年むやく
てあゆうヨウヨウするもて念佛してまことと
と無下るうきととせんねしひう年むやく
すすとうひてゆくやうみやうやう念佛や地念佛
くよてふられへ極樂のむりうめりうとひて
もすとそりそ思ひだかのせよもて地獄の

途をひきしもとソヘつま車につきしも思
せりソト移はるのねと一年立計るとして
う色こねへうの形よりてほもう色をえぐ也
といひつまし我のほりやそつりのほりもそ
比獄よおつまやうかそのあとゆーさんとい
アモ火車とくとくうからりゆきやうくーーーー
モモヤうよせよやうひんれきてーーーーーーーー
キテツハキムヨ通達すつうれ鐘のものモ
ろわり火車、色わりぬゆくとくうりあうて火入車
モカツモニ移ふハシツ色今夕しなしするとて
すりて院けいとくもくアタリうの坊や茶師ちつ
太門の内の中はあらわす今ようのうへ
すーてありまもうちり船八ねけうひくもくよや
車追色アキマタウキモチねとひれきくよけひ
ハモ法あハふあハ地獄ハシツひとう西風うろき
五倅園モカアハアミは住下種育うりをめの國よ
さううてと圓の田をばくまううまのうもじ
國の苗代子アテ植ゑミ穂子歌子の苗とみよ
りきてうつし人をとかくもくよねああはけめ
てうへつさきくわうす死などりよ物小さ
をみと子か子二人のことあはすとまやうのを

まことに此處のつまむれを食ふうあんといひけ
きものよせとくみかづきのうりうのま
ほくまゆへまめりとありてて勉強をめりなれ
をあきみてあるとほくまゆりあのおひめり
にうりともせりてるみきうれと取食てあ」
くもせらふ秋とさりすりうりうつまや
うりともせりてつらう田んよくてあきこよ地と
うとしだかきうりたまの里とおぐく薬をああ
にらうがのうとか子めくうとせりとく又うき
う畢竟小なりくくしゆ、大ケツちあだびりはき
も田島こぢくせくまてばうちをうだ妹肖う
ミつりありりんとまち下にわづてつるよか
うそうあんぼういとをもまとて五坂の國の山の
中にあらまき人あらまし
はううきの山一あらじかうりうり吉林院の茶舎
よだまとの山下まよあうりつぼと西院山へそち
くもりて石橋りりう水のほとと西院山へそち
三十りりかゆゆひてああこゆくらぶ橋とふ
こゆてすれゆうあとよく、つ色うれとくは
からえまくううくらうしれあらへゆ
てのをとるのとよくらかものうりうとつ

はるひゆみせりもかへきりよたらてゆゑせ
らをそんじうふものかやしめなむかみうす
うやくしていふ思ひて行すりあんしゆかは連
しもとづくとかくうきつ報言せしと思ふやれ
うきしやうみんとぞあはるたらて行すじゆせ
やみうづなとすれどもよもととよくらがまの
あはれきもくわりなり又わざりやうるりんもま
きくらかはれかほくして行ばうりつへる
きくみ宿初うあはくわたりふのみまく
もれりうきかきしやうみしもとてこれかんり
とれもとあみ行進する林院よりつまゆ寺

力りこしきよのわきてばかわゆもば蛇もの
まてばかうす一わくはくまくわれてこれと
みじきこもくへき希有れよきうかごとめばれ
たをみうやどふうとてゆれとからうりがよ
きくしてくらうもほく出ゆひかあきう
かうくやうみんとて虎はだらてゑをまほりへれ
下あふるひとまきてあはうれ家よひもくらが
もそくて入ぬれそあはうれ家よひもくらが
ひくとすくわが先あひとううとくとくくらが
いこわしすくわが先あひとううとくとくくらが

ああ三事にてゆ中うるのやすへんにせえとまろへ
ミホ^レ已候もぬとこよりひつりやこよきせんなりや
といへてくれくちうきのつを、まくかと家あがーと
思ふ。あくにやうり漁人ありといつても老とくみ
り、一そそてくれうの漁そといつてくれうあれあれあ
せり。さりとあよひつる。やとうまやうりと
せりりとあよひつる。やとうまやうりと
てつらてくれをねじき力あつよのわらてはかせ
たうくらむくらむくらむくらむくらむくらむくら
よわくらむくらむくらむくらむくらむくらむくら
まむくらむくらむくらむくらむくらむくらむくら
まむくらむくらむくらむくらむくらむくらむくら
ぬよげうやすをうと。ぬよげうをせたりまはす
ぬきりとみうくらほとよ。とくにくれにく
らく歌ぬきもくらかものうちきぬとみくらみや
うもくくはぬまとおやゆうかよりへやすくや
とさをなづのむつまよどやううう三すまくしゆご
やうゆくとゆくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

やへりあつてたゞかはせなきをほるすすゑの
よしの死相はやうむるまことれぬと稱ゆて
ぬいもあらんと思てまことにがまくひがまてやまはぬ
えほよねがきてとどかくもさげて家うつへや
えうせよつやうこよひ爰としそうりれといふ
りふみのうやめにいたねに花よぐんでおれ
こ思てやまもあよりうとくまも蛇ふ
ろせきよのうやうをれまくとう
らうともものうとくまくらうそれおもじけ
て石橋へもくよむくばやをすくしてわひ
こ思ひ井へうほと小瓶自その想うが一叶を

かくよ一泣しよだとせられてゑひうの苦とまゆ
うれてうかーと思ひぬりもこれのむくー川
のあとみをまわりてうらうひえやうんとまく
ゆとくすとくすとくすとくすとくすとくすと
ものぬとまよあらうよもよてむくらくらとくら
てうれ力そんとまれるつま功倣力ちくから
ゆきうりと院といぢ、まそゆくてまつまつ
うりはじくひよかうくうせまつてよれだと
こなとうせまつあまかりこゆと百えみづま
こなまよあさきなりてほんりある女乃

きひうかーとふきとのまぐる中うちのむちもだら
やをひすうこくよひうおせうきうきのふ
説よかひる道もねむれあひぬらまくつし虎
るちて、あめにまうりーと大またそのねの河のる
猪とあくせき下よりまくらなりーとくく
ちあるひりまーとて西とさーまりーとくくと
ひきやさんと思しやもつきまりても我まきと
ウーミーとてりやあくしをらんとせうろーく
てえやがーとせせ城謹に達するたくらうきる
ヤーもあくもえのきさくまーうりとくくいわ
しゃり又くさりたマーノミカラモとてしや

ゆーとくて思ひのひくせうひくまうて東とあー
居けうなりは東中もくまでもは蛇もーらのりと
よひりけうめてやねにまくらうきもさみもは
らさくまーうりうきふうくせうくま譜をーのく
あくやーくむうろーとくくうワーヤうり外
もーとへこれをほいてまくわゆもやうんきーと
くまひてぬもつひナトひうづひほ、あくくよ
うりんうりよアラキテヒムサムカムリモア
はキアヌトカムサムカムカト部目元のアーリ
有う事よナリてとうのモークがじてそうりりう
るもくれやーアーリと

東かほの赤峰は一也りうきもとをハツチ一子画
人まで人やよせびとへ立ちりうせもひとつじと
うたひもひつゝともうりありてられをりうき
うくいんや一二度へやるゆとをかんやしてきよ
うゑまことのこまきていくそもくわざり一を
してくせだうてきちとあくまゆ一き事や
ひくひあきうう一モリてしきこうてう一モリ
に井とえらんとすう祖よつまーと相人めりの
まうれりへえりけりうはあしまうらんとまうそ
くふうりてりやうみてんとくまよゆうゆうま
これやがるを、口うしわうすくえ相き人なりと
りええふうまゆりとものも難きとね相する
防かやじひてうまうりうらんとすれも
うのきらんとまうりうりう人のからてこたわ
しれうりうよううあしとまれる口うしわうそ
相ううりうよううあしとまれる口うしわうそ
うくおうだれもまらんとまうものとまう
うういてけひつゝううくの事づるといひあ
きく本とくえだ相さんりよなれうさひうよ
うちひきもなくとああよつて事づるうとや
うきえみゆん心あくとてけ跡ようりうれ

ま至つておきてこれ未諒ハナリシモ相づか
日そりテ一く理らみて一トノノ勢はれあくまん
ノミヤシキをすらんと相りりともむりうあ
カねへもみくらんとぞううきりつゝく
ミたゞ諒をよまとひなまくふうされ
うしむり

急川へきいきく信そもまけうせりきもの東をく
さりほくよろくくつらうきかよ思はみてうれと
ほおよそ三川へゆくそりなに宿のうべか久布
あひてよろこびくちとおもてえじ努力
げるとつうきのあむちよとうくせくよろせ

うちもひきらるやうをめんとすともやし
アリマテとひきりのへあこや
まやくはりと田一引のくてあそいもか
シキとひきをひつやかくとひか
をくじてあひゆみにほの鳥の目も
血の海となきて目をもみまえあせられよみ
あせりとみえたべすて立ちひくも
うりうりあれがくわむと奥へりひてや
なまけたりがくのめりゆくもくべ
ろみをくわきわくひくらのつぶくこと
まくらとのひくだうがわくらへた
ひくらうとくとくとくとくとくとくとくとく
もくもくわきなうてふみよちてくくみ
せぬとれかはるなりあくもだうてりう
やくもくうやくもくれはくさりたりきくひく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
ておゆたひううううううううううう
ミくすりうううううううううううう
てくゑのうううううううううううう
うううううううううううううううう
うううううううううううううううう
家と食物えもりますて遠ナシカドリマテ

めとくもせえもへたるへるゆくもんや
りうねよをきよくうけりうねようき装束きふ
かのぬうをみせり我まうりうみうき下すり
らをあひゆうてうしとみととすり
うとしてみあもをあひげるともう
れやまどものうちうきをなくさうあうや
こつひてあうくちうしてうりやうり有り
くうりりうりうりとくべあうくのうやうう
小うひへつとくべうりうりをうりうり
今モ若年食ぬ若うしけり町常は傳承へあり
易傳の傳承よううううり八十九のや法を傳ヒハ
モニ千経ア讀まりたる者にはかをとみて欲心と
たゞしてなうやううやうひは成てするよ死され
こすうちひたか子ともやうこそうてゆてい
もくこのやうひはうりき風うらはせうちうく
あますをうりうそとくらうかかられをやう
きれわせとくらうに呵ひりてゆくく城やま
はやとむのううは三う年不食のやうひま
さりて今もまたよ蛇ゑういだらばんもつゆうま
じうりとくよううよ蛇ゑういだらばんもつゆうま
ひてうのじくりへ河の水狂なまきを生病者

アラトモテキテキ一月前をもとよりあひこ日
のちあらじのつるとなくしてよまくしては
シトクされとひかぢうおくによまくしては
かうトムたりとをもとめしとあき
モ、ちゆにあづかとソリテ、おらわしむ
きましんぬあく。花蓮をもとめしと
きとくわほをられもとととて、もとてつよや
つまきとされて念を減らすとて、もとてつよや
字もとくまとせらうりハ余餘アヨミモアリた
ろおれの家第一の又をもとめしと
せらく圓白務めとうかうをゆへかうをゆへ
やめゆくと生勢ゆへ信とうまきおもくは勢ひお
傍ひと生を活へといひをもとてすもちらでゆも
ぬえれ女宇治後小思ふれたり、努てつてして家
柄大没四條え三井の元國産主をうむをわすとそ
きの今をも業をもむあゆる町山堂のへき改めが
せられ多モリヒとくをまことわらう不使
の事一やとて解税も親附僧ゆて、一業をつ家よ
ひうひのてか持する爲てへたちうちありうそせ
して用申一びいじそのり又目とどちらてさり、さ
是之今をも民部大浦萬昌とつよおうやうとやう
ゆ一役收附差人あひも申るすとくわゆ

おうりおう件萬昌と又は僕しげると我をかね
八役やもんよりのまわらをとてあひうさりけ
やとふる金んとあきつあてうとーと僕
貧ひあひよりうそとばあ日イテテトシトよ
ひれとあひひりうよこせうす股うりてう
やうへやくふりほじゆそりうすとそ萬昌
きそソウカラきのときをほたうからしとーき
里よきのときをもアセモウうらやうと
キリうきての海へまうちうだとうううらやうと
々たまうしとソウセキクレモふのうひの
民ア太浦み佐のまかうきよとうしらヤ度と
のひうちれにうやびて述ようり又はふれう
のひうちれとあつてとつよ限あつやう
それりとまきのうをまうあうねかハキラ
た、あせひや、ふあけひとくとくきてほ
カか身のうへよーううりてつりうとせりうす
のうとまうやとくのうれも我せんじりあらう
れとせんじんとせりうれとせんじんとせんじ
ひわらをつぶよすノリよ拂ひゆえうてあら
ヨリカねすうやうしてーありうらがわと
のひうちれにうへよーううりてつりうとせんじ

うりが身をもつて、自らそつきあうておる
是こそこそもは朱雀院あるべし。其の大きさは
ありりく、対段丈八尺、幅五尋四尺、高さ丈二
よ所見。千人衆雲入を放ちてやうそりしく丈六
の佛、二千人子孫不^トとめて丈十間也。又
打ちきうれ。一ひだりく代もかうへを他里をあり
血赤もとむとくう。ひ西山なりもへづしこきよ
もとてぬ使主まよわせつとせんねくしやうな
の佛とけくらう件の佛山ノくへんうちのとる安
延年

らひなまとのよりお生の運をうそりてかよ
已テ利生するにす人氏莫の大御神又実主
えたりとてさけうをもとへたもとみを重
ゆかほとあくまつてまうりわやはりう敷下
乃所至しろ。わやしう夷よへひひひたあ
の本へやとまもむ行幸にちひまう百官代母川
ねのこし一突まつて御のうりくまくされ
用輦介のうり金沢山達一走ひうしまなまう乃
か御よ一證南す佛皆已成佛道とうくれたりゆめ
すれうちさめゆとそ
是を今きもを海波よき藏のうち清水もへ百日ま

つりて起りて下述べけ致る所よりよろづに
達則乞順自餘三度を順定かたりよ又と誦する事
ありまうと記すとすむりなうんれあゆすくお
らしと多くちうりそりてつまきも白癡へうりゆ
もくにゆてほえのゆとりよ多ぬややくみ下
もきれそり面かニ系よこれ程のくくしやう
しきととひていはまきのあよびううせとひあ
きかえゆよひせとてひのうにだらうね
けりとあるうじすしてやニようりり一地人よら
つうじとねのロク

これら今や落ち河の段山とのありつとのち物
にぞうそれうきのへあんらくおへき茂とと止む
の上よ里へふとゆくうりて義あおきよくこれあ
まくまくのとひ黒なりかうと一張下りを下りにう
とゆ花にたてられてねだうを努力をひき下りにう
ありまきへ感りりてこばらハ十二年のせん
のうれやうりうそりよ皇あおつよ西宮をうそり
だうやうれそりよ皇あおつよ西宮をうそり
是之今やも南京のうりてう僧徒へ魚介禁限を呵
詔付もすくてくわんわん人やくもやうほくも
われてくわんわんのものゝを放て魚とくもとくの
われてくわんわんのものゝを放て魚とくもとくの

思つ事もこころよすすへんまんのせいをよ
てうやとこひてすくらりとく件ぬうやひゆ
のちよ身にみちやうなうろーきなうきのともを
色んのこじまくらうからよ我あくらのそき
けきもだうねやうふかくひかりもくやうてう
僧都ういううをまうらからうてあくのうくと
つよその辛あひしりんさいああしくくゑやま
きて死めうおむうう里々りそひううのやう、
家あく一きうのうくせ下やくがようりてそうつ
のうへまうひひてはうーとやそうつはよ
みてうれのわー重ましてそうゑされり

是を今や苦うとあが闇梨日吉ひやしろへありて
ぬれ唐絛のつととそくじよま相安樂けいに依觀主
とりふ又ふゆきくまくれへほせよ友心浦波荒不
入寐三昧くまのうをくまゆもくらうりうく
うふとうてりうくらうくらうくらうもうくく
あきへ奥房僧都ま園じるまうとせけよゆと波え
とくんししきうにゆく御事一ともあくへけまく
「そぞひゆくやじ生とあくとわきやらく屋をよ
いひらうとう

是れ今やも慈惠僧むハ全に國はせかの人なり數
山の戒壇へ人まづもあらきまへる所ありあ
うは佛寺内那寺へもアリテさうへて師檀にて佛事
を済するものは能ひてあらうしまたて僧膳にて僧膳料
はあまで大豆とつみて酢とつあればとあると
す紙をつくるそと四きけきを教りゆくらたら
かねと死をとつても起らすじつうとてふつ
みてうへととまぢやちく聖きれをすへてモ
さかねなりと云僧のいもくりううとと云
くもしまなわやうやうだつまうけ事うともも
さきくひとしこうりのまへりうてきう事をうへ
まとうとひくり僧むうちやうととゆけうを
うと戒壇とたまてぬへもあらきまへやと云事と
てつて大豆とすけやうへ一もつととめてせぬへ
て一なめがとすくととまれるまみのあさま
すととみ事へうの几うひしめくもがうと
うととまセとうけとがととーをみてと又やりてと
うのひくまけとがととーをみてと又やりてと
うとだうて不口よ戒壇とたまてたりとう
是を今や苦山寺のみつづる西へま川原と云ふ
まく袖くまへゆくよあま人のうあらありうの

きの下ものうりりとせん葉と一いまとてへり
アヘリタツトウイロともきて枝にうちもきて奥
のへをとて見まふよおこせんてせのやどる
よさむだまくねへけきと三。アラクねは二四年の
すたよさりうる教養は大略とすくはあひぢやう
よへよふじゆびりもと何ゆそとまけを地差で
そとゑくはおのあまでいふなれかおのひ
よちらすうせいらふろし急をさりぬ日を帝釋
比奈舍らのよよかあう君はいわつせ、いをもこ片
小家のうちうらまひじと思へときくめれうね
ええあくまくこと、こもつててまうりのへとい
へと目ひみ、ねもひつゝあしとりふをモヤ
うらがとろえてす小のくへゆのアスメハル
おもやぶひだつゝモロちやへて幾あまくあくた
うとくく見えはせめおきてをまなて
まうりをうみをよるうそとらとろよきしてりう
是を今やも外アハ理方丈のこやく殿よへせへ
アヘリトナセアリケリ縁はまきまくありあふ
アヘリトナセアリケリ縁はまきまくありあふ

出づる馬をよ黒馬の頬が一ろう玉露せひとみて大
きうを移し鞍を下すとあはるまことなり沒
よんきしもれてそのくび馬すうとれくと
そそのきてゆるはるほどめてゆくとまのゆい
みくちうのわとりてりと又キテモセ
じとみて又二十人を多く勞ありけきもはなをま
れでりよしてゆぢうまを昨日よりりつてきの
近きつまうちうじ下やとみせんくろ栗け子
ろ馬をそ二十むさまでたてうちけりきの額角の
こくり大くかづり力人をかうせり是へや後
段の曲子よだワタタタタタタタタタタタ
キトけきを擣磨きといひてせゆの波人へりりと
そりすよすてあくましまつへとととととをあふ
たりあるとき
是もあお腰ひすけたま構以あと云善人ハ立位も
なりて左左馬ぬもるあひのけりる今め日をか
なまに忌とはうしと候トヤとまのまことせりふ
をよりすおのれ忌とふ事ややあれとつ小下り
せり程よ十日りりあうておお馬殿よしこまれ忌出
まふなり山門外をまよひたてをとと仁王

童子すきともりきすてて僧のうありうる西西恩
めりこほ以ぬきててりうまへひつて立たうまア
いらしどと教よと神力ニヘゆく人をいきうせひ
うてたうじうひちけきもやうきおれ座うりき
れくべつうとりひきをあきらもゆきう小職
えまとつむよだきをちひきをよそくせひあり
て益人ふるてもふとかくをすうよきひひの
なりりとおきまうせひをよそくせひされう
とくもをほりきりきりうわヤヒシ長よひ、ヤ
えり、シヨウウツリスノモヤヒシ長よひ、ヤ
こかまうつらうねとたうねとたのあといふは益人
おさはぬへりきりきりくへくへこたまうして
ち、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
忌はて伏一のめされひよめ忌のうとやひしと
御忌とよとやややうとよとよあるへえうと
おうとひーとややうとよとよあるへえうと
あん伏よとややうとよとよあるへえうとよ
ておうとよとよあるへえうとややうとよとよ
是も下をむく絶久ら闇梨と云ふたり山の傍
嚴院とすみらじと書く極本となふ行經座外
西方然うしろとせとほも主張もきたかへし西

山々のやうと先へおとづれたとあめじつゆ
りもくじへ本のよみがくすゆうもゆくすの
たふうりひと西あよがはしにすうふうとこ
をきくしもくとくむ念くくりすとくじゆひあ
星注生侍アリトヒ

あれもソドモヒア陪侍やまもくわきりひす
ソドれを世よなえ程ハスラウカドウア堀川
院の山と北園の山の山樂の範囲を今類の
ソドノ元モ一ソドマウ里とびや勢うんれ
藏ヨア忍とアてこだフモ候キテシテ何ゆ
ソツセヨリと乗レテ六とし初櫻トカムミヘ
キナキナキテフクシモキナキ下山里ニシテ
ソドヤアカナトモ候ヤマツカサモトニシテ
ソド候うソヤア遠矢ちうきなよくもに榜と
ナリアキカカトモ候ヤマツカサモトニシテ
ソドアキカカトモ候ヤマツカサモトニシテ
ソドアキカカトモ候ヤマツカサモトニシテ
ソドアキカカトモ候ヤマツカサモトニシテ
ソドアキカカトモ候ヤマツカサモトニシテ

もとん家譜まつともさいもれなりゆうをじとせと
「うせりゆこいやのいきでたりと云ひて殿よ
人なとおをまりあきも今樂りうむうと云ひて殿よ
すりびとめがまうてうるよ人をお譲りとと先
きもお譲出てあをた事日えやうもくづりわきを
よよりもうの事うみやうよお身一そきややよへ
長又すくみてお譲れすと身をとれお譲まくとよ
みしきなうりきうて膝とりいきてうれうけ
てやき、もきとつゝてわきよくみしきよくす
てようすくの丈てありよくみしきよくす
らうかくわをうりちうやふらしとふて歴史と十
あることうまうつまへほりうつうよするト、歴史
りこうまでおのとよもたまうる家譜とす
ようく、まくまつよつりうつうらきゆううそ
とて中たつひて身もみうもせずしてすくろ程
家譜とひりむへもうらきつうをくのまやきて
のこゑじをかくすとのひとやお譲るやうに事
さり、うめあれあきとてえやうえじのゆうひ
もつへまにうすとのひとやお譲りうみひて
ゆき、しきひるひるを家譜へもくられのゆう
よお下ふのうれい譲お譲る云う人をうだ
ても町行臺のりこよもとうくうもとすくよ

まもすもおこなふことやへあへもとたちへ
うくといひてゐるのあひとほくさんとりひき
里の家裡はまもうますのきいもやじと事
しけ三、四人をたすみて行ゆきもとりふ
阿の行ゆかんもて行ひ臺たりとアリもて
もありてあきをすかすろうやといもくうさ
ふつきてちくうとじまびこううねに行ゆき
きなんうのらうけうそと西見やくねといえ
ときよせくもうとや死よいもれけまんよへき
奉なくてわざきてりあまつよやうりこばせ
よまでミテカーテゆくゆきまけうふて思

てうとうやうせに行ゆよもくられわあうりと
うじりう

是を今やも二隊の大えとやけうを角川のえ島
羽佐乃山母らうとびとキアヒニのえと
うやけうニ隊りりをか堀川するやあよだりしま
るをもぬれあきよ先をも賢大差つ備後國の國
をうらぎりまほの功は源理だけまもむへ
たうじよううまれよ陪從傳仲こ云ふ
ゆうひううまたアラモトモ代郎車音の
車アにゆくううきぬをいフううううううう
けううううやみきととく破れ死を呈て死事

とうりやへともの院ふくへやのまを傳仲てお
とまよてごぼうへんみだときつるて右物
新あからたくなうみりつからうそ治理する者
くわゆりうちもおほりまきかねはれ居居
れへ行ふとくもてらすくぬうあさいとくまや
けらきけきんは仲ややうおの事へはれにすたき
まよつきてひすとヤケキトカエ程の事
こくやせ屋敷くふをよもとすくやうにをひ
りくせやてまくもとゆきもとおどりやうは傳仲
もむ性ちお西うえ春日の糸が房はたうを取ま下
馬つうひをめくくまもまうりてじそうあめりけ
珍よは仲のうじほとくめんやうおなれをがくつ
まふかり相撲てつとめさせめてまつまとされ事
きばくまよもうらひつやせうとおうせられり
よつこつりてまわせやてやまくもやとう
あらなりのまへぬ感しゆじめゆう
とのてきくまよもあ馬とあらもくれをく
まろの院てこれ室へはくまくはくとはくもくや
くりうを治く者もゆくひうふりのまもく
所やにゆりてりひとひくとヤケくにゆくうや大
里ももあせとくりあ

是乞乞乞乞乞乞乞乞
りへは城ノひてうさりけうきうき傍は假名曆
つれてたへとりひまきも増筆をさせらしてう
きなまらはめけうこやうはーと詔ほくを
よううそりらきよらうとつまたりあるう
やうくまさまかなりてあうひへぬくわ日付と
うき又これそもそもさくくふ日付とま
ゆうやうこよかとせんじゆうとせんじゆ
う程るを思ひよくすうとくとくとくとくとく
うにんへも又うひきくこまくとくとくとく
なまやううとせんじゆうとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
かくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
ねぐるうとくとくとくとくとくとくとくとく
やうなみのとくとくとくとくとくとくとくとく
ねりもちりすくとくとくとくとくとくとく
ははうとくとくとくとくとくとくとくとくとく
父とまかんうとくとくとくとくとくとくとく
じうりうの妻にくくて田金へつよもりう
めり先よ見へまくわいもりへんくわい
まふさりよもうあこゑやうむちなくたよま

まづうよひすとあんとう一室のうつひと親の
あるるこなれにきていたるあらたをうりあが
ふうはゆかひしらむとやがくとやがくとあれて
ひゆうじさんよりたるもひといだみのこみ
れ事めりとゆがゆあーまくすと西村あらう
ひもがそとひそトナリけきもは志後いとふ
てねうりせらまとよちううをばくぬゆりくき
て西お居をあせとつひも運を悦て乗りに
入りはるのえしゆくらる三日後もを渡人といひ
てうきへ初々かたりをきしてのくまみぬの
がくましうひよあがはくとみあくと
をすくわうとねよとくろねま中八角
りあくまもととくにとくにとくにとくにとくに
りくらまきとくらみくらう、すば年はれはさく
里もととなく神もとありてへん程やこれある
ありふくやくらんとみてほひゆくとくると
くうりくうと回りとくらみのうしまるる邊も
せせせせせせせせせせせせせせせせせせ
もあおゆと遠くわやうにゆうゆうとあの人力
あうゆうとあうゆうとあうゆうとあうゆうと
ゆうゆうとあうゆうとあうゆうとあうゆうとあう

こそ母のりとおもへうううもおまわりりや
う、もやうえぬやとおきしきあ殿とたのみてろ
もうまされ何ゆりやせ又ひとせにたのこてもう
ますううううう一もじけせこれまくまくとそ
わくゆくもくがれきる一のゆきてたひて今ひそ
ううれへまりもくまくすとつようのるふね
てるたとお日とものもひくくいもんとふうり
いえじやな殿のうはの恭のくいであやあ
みてば男のうはすらなきてうりをしゆひんの
ことよりとそねむようおて是をあこひり
やくもおさりあさりあうくゑすねたちうか
うそあひもらひてりとふまれとせをひげう
う辯もくひとつてくちらねはるひきまーき
とりひそそげきにやまそそぐあくひめ
我とキ定まふよなうくよひてひぬるよとれ
しまじりしまでまうううううううう
あくとそれへくわらんこいもみにさうれ
にじけくろひておてうすきよううぬやうう
ざまとおひとひきとひてまへよこくあうを
ありうれうれく四スへるのまううありう
うりあひ常ももひひきくろひてまへあひて
の酒とひくまひて故よきうる親のりとま

はおひうちもおほくや所定すべしといふ
あひつうりやうんじうじけにうだえれあ
めうひてことそりとまへてよかく彼を教すひま
近のうつを教ふひといゑもんやうるなみ／＼ま
りきたいへひゆうぢておぞこきと顔をすく／＼と
ひこべ六十餘年やうぢつまうの程かとやうす
／＼このまゝうらうらうらうらうらうらうらうら
ぬくさうりとなつきめりえを浴りと／＼うら
けりゆう／＼出でてうるすく／＼うふさと
や／＼取しつとくまうるやう家主の云うや
あ／＼てくのそれうしとうをみきも生むらぬ
おううしむと、いゑもひとりゆくい／＼うの
ううしむと、いゑもひとりゆくい／＼うの
十三より年りてひま十色もう畫もおき／＼を絵
もとあぬ／＼小冠者／＼と／＼ひま下／＼佐
志／＼おとしゆう／＼をあわきゆう／＼をうして、
ちけやう／＼をあわきゆう／＼をうして、
たこりう／＼をあわきゆう／＼をうして、
琴のよやう／＼を／＼ひとひきしゆをうへ
らま／＼り我ち／＼とひのておうり／＼ぢまお
ぞのま／＼をあくと無／＼ううを／＼すと

うのうち死ぬうつむやうう思ふお力事にあつ
とひ田舎はゆきひとお殿先生はまじひて
日下一本ありてけりうさぎをあもおつみ供を
びとせて退るありゆゑひしゆうをくほてるを
ウ一出でたれしてゆーたシ。ゆーしきおく
ゆーすのちもうと引うをさをめのと
みうきあさせてゆゑひあにぬゑわのま黒
すくわやーつゝとおやをもすくひー
あねのくかとよおやをもすくひー
山鳥憎すを月とちよみとだつてまーう
ゆーられにワキヤてちよとす夜のこゑきこぬ
らひしとゆはうのまゐるくもゐと
とゆみわ又ひもりもりもりとてゆく
又引くつあぬとやくとひりとひりとこころ
うれがをあ方にまをだりほんたるはぢり
きとひれそんとやくあふとひりとゆ
け、うそをうきううのき

きとやあ一あち僧と山室戸僧ゆそ三井ノ門
流よせしと日本人ゆきうり山室戸の僧ゆそ隆
家ゆのゆ四ノ子ゆそあち僧ゆそ隆浦大泊えの
寺えのこなり山室戸僧ゆそ隆めとゆーまちと
贈譽とゆふれ二人きのくまくてりさ佛るり而

室戸ヤカタアモテ原野すくよをよもひと画トナ
その所あともされすてよく畫わくちふ於の事
たかうらだたりらりらきの所ノ人食乃むし
たまを門をしつひるモトナウ門とくくじだ
またひとのおミテたまシムキムカクル人
ル事ノをみだりウチを院の使にゆすぬなど
い色モヤラシアリモニモ奥へ入てびこよあう程
きのあしまつセセシテシムナシナリて門ノ寒木
をもうつてヒツカヒヒスヘヒドマリシテ
ウモヒリヒツカヒヒスヘヒドマリシテ
ウモヒリヒツカヒヒスヘヒドマリシテ
ト一るり妻ナヨウリモヤナリナリモ
ナキシテヒヒスヘヒツカヒヒスヘヒツカ
えすシモツリナリナリモセヨシモナリモミ
セテおミトヒツカヒヒスヘヒツカヒヒスヘ
ヒツカヒヒスヘヒツカヒヒスヘヒツカ
ヒツカヒヒスヘヒツカヒヒスヘヒツカ
ヤツヒツカヒヒスヘヒツカヒヒスヘヒツカ
ヒツカヒヒスヘヒツカヒヒスヘヒツカ
モトモロキモツシモダツモトモトモトモト
モトモトモトモトモトモトモトモトモトモ
モトモトモトモトモトモトモトモトモトモト

歌ひゆゑをやとくぬうきのへとうきも云ふだり
ありもて出ゆれも又門やまへつこれをひと
色小居初ひしん人也一まち僧ふモち岩を二だあら
れたも蛇とみせばれもかく又竜の跡などとみゆ
とてうし走ねりりさまよて初ひづる人なり
うす坊を一町りまどりゆうて田原猿樂を
とひりう死ぬる者之のをのとせむとお入り観
く物じりとくりままで聲あわきののと
ろをうれうりふあいよあくひとたひりまやいは
とかてうほひりうゆくは僧心のりとよよの
室やつとあつまりあそびりうきみせ師小院と
りふ童をあいせらきそり馬羽の田植よつたふ
なむうううれくつひよびりけくまうま漢ふ
りうをのくのゆうをよ僧心のひらこまくこれは
すうやうよ角にたらくしてこもくうりぬたり
けきと大かくみる者もまくあうひうちうり
はようハ餘どよてうめじとてうううはゆる歌
て継登もされもつまてあまとうりの音をまくへ
りくひつうらん今アリ一くして供ふくやと云ま
むと傳ふねどもあ一そよあきなれとまざりとく
うもあくふ波津ふるりよアラシとすくれ道に
春あむうそそつづくりあらに僧ふ人をまひ

てのそゝに腰束やうがりとそれのまゝに傍
わざと殿はいきへりと丁度を取ててといふれ
たりみてまちまつりとおとせたまといふれ
即小院みくぢの御子といふきを唯まよ
ときめの経典もさくもひてゆきうきてふ
うてゆくだらけあむりよもらと傍に
うちみくじとほくらきそり小院又わらすま
してたゞさげる僧ふ来りよもねあやのやと
やうはれをねまきまもゑくしゆゑも
ひてこそうへうのくら事られやかやえひ
とりひてせうのすらりとてう死地獄とは
よみかゆとりうて一拍子ふりりりりりり
ゆきともうちてふうきくりゆくもうちによとひ
をとておきてけくなれよ出家とまをまんとて
なれられ乍も小院もされやうりとふうとヤ
ひゆいのととりひて腰束やうがりともう一の肉
色くくまくまくまくまくまくまくまくまく
アホもアホもアホもアホもアホもアホも
是乙今をもあう傍人のひとゆきうり酒をと
をせりにあ勇はへめし出またり氣へあう
ううううとめてりとくそりうりうりうりうり

鬼の心地かよすくなく歎息をもろくし
りうむともへきと人をやうもなうてこれも
ゆふるかまうは傳聞鼻より吹ぬの
一ゆとり、ちりそれうちやうやうやうやえてて
の鼻よりひきの出たうそりう事か。ひとま
きへ取ひあへてほひのひをもともすらうひ
ううやつらうはれへんきとよみひるま
きも外やま仲凪僧院と山の大庭の二家とて
法光院と徳意院ける導師。わきまくらうは
法をもりしすてくてくは地主あしまのり
せやゆうゆくへよてば經難持若普持若持易持若
諸佛やねじとまえをわらまく通して諸佛と云
ふと比主燈院のやあとを我易持若もよあんやく
わんじとひたりのまへうこうあううりううう大庭
吳や因もるうり死て翁とひく死けうひよだらう
これとうぶ人自身の祓はぬく神とううワニ
てそのくとあつて千日の祓をまうひりうよニ
まうひりうのゆりうう縁はうとすうもう色
こもあうりのう或人仲凪僧院のまうひりう
を諸鬼を仲凪僧院もやうくとわして是モ
うくの町仲凪のまうひりうも大のまう

きり玉やうとつよすおもんの糞と食てこそと
あうやちうりじうをのやうととりてはふのせつ
まやうとへすましよれひくうせつきやうとつよ
がりとひり

あまも今もあち二原殿小式ア肉盆ぢりけぢ
たもまつらよなりけい重ひなくぬひだりま
てひきとするまでよろくをかりてよ東門役
へあくをぬあくに小式ア臺盤ぬるたらあくよ
おうをぬうてえりんときもうととをうまう
とぬうきてすれぬうにぬうとれもうとひた
とくめびくやくま

ふねうとがくよとそを教あつときてとふ色
たかうとあくねやあこをむすりうととくをい
ふれて高へおけ一かうとくねうをゆひよまつ
あれもかやま山の横川は実能ら院とつと傍まつ
て彼戒寺懸の若とて書やる佛の内とくうと遣か
くも山のとふうり横川のふゆまやうとくうと
を落のりとようまくはりて阿くまゐかゆりあくと
おとくとみをようりて阿くまゐかゆりあくと
うらゆまくはとくへとけてますとくへやうひお
うけゆく町をうるううねよの實能もと

なぐうを々而の僧教えとまきてうの僧被戒無
慚の心すては世にあて地獄かおちんすまうり
ひうとふるもうしきみがようきりをし
あくらむ程よううのひとの地獄うそちの程みまく
つむりうくらむようや院内の人うひうひたり
人の修理をましとそうちまうちわまくとひ
りうかとよふれ僧部のまごみがゆううの地獄の
かくらぬそりうきうとそとあるがよせりう
玉傍うりそりくくめらうり井もやう聲能ぢ院
うじきんらうくよだくしうの日やくくたそと
じてあひくしてうき寺とよ爰ひうよと
あこまくしていりうよてうう色人ゆうく入へ
極きうそとくひたへをほのりとを常よすくまよ
せ益をみやロアテマクおつみまりしゆくさと
あくふ爰うしてのううのううしありすきそばは僧よ誠
よきしてハワアトうやこびうそばるをばるをばる又僧
衆の爰よみがよううのひとよせきてみのくそ
あのねがうううううのひとよせきてみのくそ
まがうして地獄をつてたをりてぬりうけりう
まがうして地獄をつてたをりてぬりうけりう

身へもまことにゆううらう覺ゆひたるゆゑひ
らは寢ようそりやくあるまゆうきのうりゆく爰にて
寝こもるすてとくまおつてたうの许とみゆ
あやゆるむらゆうたちうてゆあきとみまくま
よをのゆくまられとみゆるまゆうき
まうそとなくくよれちうとりときゆま
ゆてちう今とゆすよなえすけのほとにうそ
とんや諸そ一是ゆりくんきたあくをりうとうそ
畏もくや苦な承度をとくふおりるて闇魔
の庵よしぬれへ玉のゆあとむりき本小ありみ
ねまきのゆりゆりゆり子とほりとて産てふうとて
ひこうか死ゆく地獄。おうて苦をうくう
うきをやことれあがよ。うてゆとそぞうううり
きうきう事ううつやとくうきく度坐さうするさう
らじきと門玉のゆもへほのうくゆりひくまき
男ふくしてとくはれとけくつそしもつまきのみ
と産うとうひて死しては獄よがらてくろんへう
なま苦としけひてやもいわく色口うぬせ城
ぬをよそうもひきへお一人苦をえきう
やうにこそ苦をえりうもめとやううりてぐ
まうせとのゆくも度きうやうじくへや事

もつとあるありよ候ひ身やまことへ世と
とうこひるふなう後世人をとくひはそこ月
自はうよくすたうくぬるもあし今よをま
候てやせより苦とうけひときれうこち
よくのたとうだ色まか候もそれせばなやわ
まの候ゆうとて婆娘めううこうて妻めぐらひ候も
よううと捨て佛燈と死代類しにわいしてよみらひ候も
むとヤセキヨアリヤマシテモの候くまきう
妻めぐらうとせてもしちまひろたうくやうと
とひやへキまく達佛だつぶつとふまくせん
りヤムモトくめうしのくやP付よまひろ
坐くわうとく坐くわうのくわ候まくゆうも
はなとあう里さとぬきうつ小妻こめぐらための佛燈と代
類しにわいてよくめよどとてうをしりうと度たが
つ、きとくれハカリくたまうの爲ためうやもあ
らきゆうされて産うぶとたちてうゑうるよて思おもう産
うじの薬くわうりよのうをぬくやうの物もの
えとせとせとせとせとせとせとせとせと
よるいきう薬くわうりうのうをぬくやうをうりう
けううにへううすやううして又ありもへそと
とせとせとせとせとせとせとせとせとせと

とううかりてゆくと火因へうをつけてや、火に
のぶあじきもんの火因へうをつけてやうつて
里ひもじとれまもてりふせくくらむくじ
と恐なうとれとあよきまもとひあると
ヤセキぬうとせ間は控よてや教と地蔵菩
さうすとの法とよみてそく魔とやモ地蔵よ
うをだりしまはれはやうすじうまうりひの
お祓の苦ともあゆうとあられと思へ
程よ三日とよふりきくらても後敷のたより佛
縛とつまく作書とくらとそまうやしの法華疏記
よつてこつりとくし

今やるせすちこつよふやり、そひく大酒を往詣
けううちるよなうをもつうりゆるはれハ大答
もううのまうふ御理しきうへいりひもゆ
程、あきてとて像ようきのぬげうもんみみゆ
びりてやあああうりうもんと見てすみあけうも
は言と一深持ぬうちもんちぬちぬちぬ
食あこがまれうのうつしやうひもみよ城のうり
けく築びとつきせうのすこもあくうつう
うとうう殿うこよ堂たてんとゆうらきわれもん

すり程貪の邪まうらしといつてゐやひあくろ
うがもんとまうふえせうらひして多くも謂
してあぐらくふとらそりまくしげうまで人をみ
ゆうじふよゆきとよくくわひとふてあういは伊
禮瓶子は酒へきてておひづれぬえ本草るを
ゆきううううこゑを産うりがとえりて人をす
れううゆかのまの陰よ鳥歎もすれどそひと
里食のとじせみがこゑと化すてもしす
るやう今膳室中食飯 酒大安樂だと毗沙門天務
天帝釋とはひきよ人うきに一人のてゆとく
ひさけとのひあくらむうとひわりんを

あめくふもあくらいたまくひうと帝尺主とひ
うとしてらははく一やおほりけうとやう三長老
ううへらる化し路々奴あよだりはしてお山の
てお行むらまとまうりたまうとやうが
みもうれてあひやうとまうとそとそとそ
とりばりをそきて妻子とほりまして後者ともうま
まくねまその人々も波折志あらしまよやくろを
おみま見てわまとうり程も底心もあそびを
まくら倉をえれめてまく宝とも三の金をねらひ
まくらあざまくまくさいもん方をひひう

とすすうとひれどもつゝとあくおる
こうらのへかきてくじきもアマナウと限
すあもやつてしまだきのうをうそうとじつも
まつりと人うしの門よし色ヤセモトシキよ
やへたぬあきさくよみよ人に物をひくとそ
ヨリこそと候もあとヤセもすもあう腰の程小
ちくひくふれ入泣モレハシヒシテキモトモヤミ
ヨウラんせよとくよよのきくみせんたどもやミ
うれとめのとを経えゆじやき二人のけがう
やうよめんめんとひきや力なくてげくきの所と
よ二へなまうありたまそまと見えやわくと
ひすくよがりて所あむびくまでもろじし
ヤセ方かと思ふ程のとけの所力をえてやう
てばぬれしもとせうしたまや恩きじもうせ
きくねぢじあくろもうあくわうよ帝尺そん
そみりつせ活みもろくううくろよむおうさ
いとくちもじとをうよもほくせん懶食の
業よもよて地獄の苦色だとああを経て西ひさ
ようきてつくづく西うきぬぐりとそりてたきれ
今をもれんとよまびうててうるうやうあら
はうすうとれうまうよは水色人まひとて千
日あふて第二だありそりをぬりくもくまく

お身うつありうるううりとう人もひゆ
今もまもまとやくそそすくろおまなまの放縦と
をとこらんとそ先よほ行ひてひまくまなうめ
れ奥の谷へよこまへよあき本のうよへのほ
りひうちとつうきてゆうた事みをあらうとう
まくく里とうもそのち今そくえほとよがりぬ
らととおやゆうかどよ子とだろもじとて亦ゆき
てみよえもありしれ深山のうきにせんをせり
らねぐよのうくたつきのきの技やおよさ
らおやひからめとみす飯食てことうとくとた
うをひめくらへあらまくみよえひとくとくで
たま齧とあきやすもううろらんとてううつ
もうますのうよやうくいとひのううと
とすうねよぬまへやつ技をきておにあ入ぬま
のうこまよゆがくらまのうよおちゆうよそ
そすへきくへりあくらやまよおこはりうけのう
おおうりあくらやまよおこはりうけのう
ううひとく死ぬしこふううよそりくう
とみそことみてくれくももてつりかへば
たちみもうけきてくももてみれわせもくと

井もあらりたふれうる。本業をけくもてらう
下なり。ゆるよひやうやう一回くわがだ
うききし替りえみとつま方さけきもあると
てうきよのうれぬよぬつてうりへと
へも東子えきしまとてせむつじうりへと
もみゆううりへりきとくよきもねほもす又
おずりうりとくうひもあらぬふそさうり
のそきよろはよつてうきとくみとほもうと
るも城よそそきとくへんこもいづれを成ぬうてあ
ふよをよくだててててのうとのわ布の廣さ
まできりぬとくひうきよ戻とつあくまえく
とこらへてがもみうくを、あうへいゆくうも
りくらうを、おへゆへしうよとくをんう
きくくき飼てや、そせきくきわきわきなぐら
と観音達と、便まりたもちまちまちの助めへと田
入てひくを、ゆゑを、うりてこだ、達と、うる書いく
ひうのを、まくらふううと、おてやくうみま
えもりもとたなう蛇たれうる、おこニ丈うりひま
うしと、のれおつまへようてもひくれをわきへ
は蛇よくられきとすうおうりとつまへだまきか

か観音たゞとまゆへとてこそ思ひにま一きりあらう
ふ事うやふてわくへりかてあう様なあくまふま
て我のさのり、とすれこわ縛を力まんとゆ
よをすゝへる者もまうへゆへのやうじとすくま
しめなれどひうともゑあまよちうも若くもや
のやうもしアニ思ふぬつき、腰の力をやけ
ぬきてば蛇のせあうよつまたくもきよをつる
て蛇の初まくよひ、まくのけも各うらまひ人
さまに「うく」とのりうるわは男もそれくわ
くううへりがとくじとすくとほづくへきたての
ましえゆねがとぶりとて肩にへてみゆ

蛇やとうろとわじてひうひの巻よもぎ
ねうの男うやーと思ひておもくもえてゆうじと
すとじ二三日いあくうもとつへらうゆ、物
もくわきまつて巻きやうも力やうよやをまうす
ひうへつくとやうくよて家へ行差ひそそ
家よを今さりとまくとて汝うふもまゆ縛のゆ、
まくとまゆだまくとて眼をうるあひうもまわひま
うううて觀音の所助まくくのまくとまうと
まうううつあもとまくとてゆがむとく
てモ乗や車をみてほどみてう、おきてあらう

て身も寝もう達とまことにひまつをなすそ
うの者こそ蛇の宵よつまたてししくおは西
よ松檜原ぬ海のところよたちちみすより、う
きあーひとへきりうからこゑれ達の蛇に斐し
てわきとたとまだりしまさると思ふにあくれば
ううとくゆきつううと思ふあやまちをうう
力あくのりのんあきとあくへんあくみけりつ
ゆうやるがんとううは観音せらのみまくしよ
うのちるーきとつふ事あくまよ奉力り

110 X
401
8